

#### 4.まとめと今後の課題

「一人一人の『わかる』を大切にした学習活動をめざして」のテーマを受けて高等部ではその定義を模索するために文献をもとに学習会をもち、それぞれの考え方・思いを話し合ってきた。しかし「わかる」ということは人の内面の作用であり、哲学的な要素もあるので定義を明確にするのは困難と思われた。そこで「できる」という、より評価しやすい要素を加えることにした。また今年度の研究の切り口として課題選択学習を取り上げ、「課題選択学習における『わかる』『できる』支援のあり方」というサブテーマを設定した。わかつてもできないことがあり、わからなくてもできることもある。またわかったからこそできる場合もある。「できる」と「わかる」の関係を明確にすることで少しでも「わかる」に迫りたいと思い、その話し合いに多くの時間を割いてきた。従って実践についての計画や話し合いが十分にはできなかったというのが実情である。

少ない実践の中からいくつかの事例を紹介した。事例1～4は生徒個人に、また事例5は課題にそれぞれスポットを当てたものである。個人の事例からは例えば言葉での指示がすぐには理解できない生徒には絵やビデオなど視覚に訴える、また集中がなかなか持続しない生徒には教具にシールを貼ったり好きな色にしてかわいい感じにしたりするなど、生徒それぞれの性格や障害の程度・特徴に応じた対応（教材・教具、見本の提示法、声かけのタイミング等の工夫）をすることにより意欲が増し、集中力も持続することが述べられている。また課題の事例からは同じ課題であっても学習する生徒一人一人の性格・特徴に合わせて内容や学習方法などを工夫することでそれに指導の効果があがることが確認された。どの事例でも生徒自身のやる気・意欲あるいは興味・関心が最も重要であり、それらを引き出すために教師が生徒の思いや気持ちをよく知り、手立てを工夫することの必要性が指摘されていた。

今年度は新しく研究テーマを設定した、ということで時間的な余裕がなく、学校現場の研究としては不十分だったことは否めない。従ってまだ多くの課題が残されている。

第一に生徒が「わからない」「できない」のはなぜか。例えば、マット運動の開脚前転ができない生徒の場合回転時のスピードが足りないのか、または手のつき方が原因なのか、あるいは身体の柔軟性や協応性などに問題があるのか、それとも恐怖感など別の問題が隠れているのか、さらには指導の仕方が生徒にあっていないのかをきちんと見極める必要がある。教師が生徒のことをよく見、正しく理解しているかどうかが問われるだろう。

第二に生徒にとって「わかる」「できる」とは何なのか。その評価も含めてはっきりさせていく必要がある、ということである。事例にはないが、「箱折り」に挑戦したある生徒の場合、組み立てた結果がどうなったら成功か、あるいは失敗かについてはよくわかっている。しかし指先の巧緻性の関係もあってなかなかうまくいかない。この生徒は課題を「わかつて」いるのだが「できない」のである。このような場合「何度も練習すればいつか上手になる」と経験主義的に考えていいってもいいのだろうか。そのうちに意欲がなくなってしまうことはないのだろうか。指導者としてどういった評価をすべきか悩むところである。

第三に高等部、即ち卒業（＝社会への巣立ち）を間近に控えているということで卒業後

の生活をも見据えなければならないということである。考えられることの一つとして学校における「個別の指導計画」を受け継ぐ「個別移行支援計画」の作成が挙げられる。しかしそれだけでいいのだろうか。社会人として生活していくことができるようにしていくためには何を指導し、どういった支援が必要なのか、検討を要する事柄である。

第四に課題選択学習（挑戦学習）ならではの問題であるが、ある課題を選択した生徒が課題の持つ本来のねらいや教育的意義をクリアできない時どうすれば良いのかということがある。あくまで課題のもつねらいや意義を大切にしてその範囲を超えない程度で内容を変えていくのか、それとも挑戦学習の本来の目的である「生徒が意欲をもって学習する」ための具体策として捉えるべきで、内容が大きく変わってもそれはそれで良いと考えるのか。いずれにしても基本線をはっきりさせる必要がある。

今後の課題として大きく4点を示したが、その中で特に第一および第二については保護者との話し合いや進級時の担任教師間の引継ぎ、また客観性が必要なら諸検査をすることによって一人一人の生徒を十分に理解し、それに基づいた教材・教具の工夫、環境の整備、指導法など「わかるための条件」をきちんと整えていくことが急務であろう。「個別の指導計画」も含めて真剣に取り組んでいく必要があると言える。

今年度の研究では課題選択学習を取り上げて「わかる」「できる」について考え・模索してきた。そして生徒がわかってくる・できてくるプロセスについて検討してきた。そして改めて「わかる」「できる」ためには生徒自身のやる気・意欲あるいは興味・関心が最も重要であり、それらを引き出すために教師が生徒の思いや気持ちをよく知り、手立てを工夫することが大切であることがはっきりした。またきちんと課題を理解し、興味・関心を持続して学習を進めていくためには生徒の「総合的な育ち」も重要なのではないかということが話し合われた。さらに高等部段階の生徒は肉体的にも精神的にもある程度育っている反面、未熟な部分をもっているので個々の好みや感覚にあった教材を用意することも大切であり、指導の成否につながる重要な要素であるという共通認識をもつことができた。今後、他の学習場面についても今年度の成果を踏まえて実践し、指導していくことが必要であると思われる。

(石井雄史)

### 【参考文献】

- 1) 山鳥重 著 「『わかる』とはどういうことか—認識の脳科学」 ちくま書房
- 2) 佐伯胖 編 認知科学選書「理解とは何か」 東京大学出版会
- 3) 全国特殊学校長会 編 「障害児・者の社会参加をすすめる個別移行支援計画」 ジアース教育新社